

状況の it について

前原 由幸

1. はじめに

代名詞の特徴は指示と代用にある。指示する内容が名詞句以外のこともあるが、主に名詞句を指示し、名詞句の代わりに用いられる。ほとんどの場合、主語、目的語、補語、前置詞の目的語の位置で用いられるが、一部の用法では、決定詞の位置で用いられる。指示対象を持つことが意味的な特徴である。指示対象と代名詞の間には照応関係がある。指示対象は、直前の文の中にあることもあれば、その代名詞を含む文中のこともある。また、さらに広い範囲に求められることもある。談話の中のこともあれば、言葉を離れて外の世界に指示対象が見られることもある。言葉の外の世界というのは、例えば、指をさして、「あれ」「これ」などという場合である。聞き手は、言語そのものと言葉が使用される状況とを考えながら、代名詞の指示対象を解釈する。意思の疎通のためには、広範囲に及ぶ代名詞の指示対象のなかから、矛盾なく、自然な代名詞の指示対象を見つける必要がある。本稿では、代名詞の中でも独特の指示対象を持つ it について考察を加えていく。

2. 代名詞と照応

代名詞が照応関係を結ぶ対象には二種類ある。言語内で表されている情報と、言語外の情報である。例えば、(1)の例においては、言語内で照応関係が成立している。(1)の she は前の文の that girl を指示している。that girl が she の先行詞になっている。

(1) I saw you talking to that girl. Who is she? (LDOCE)

ここでは、she は the girl という表現の代用として働いている。代名詞のおかげで、同じ表現を繰り返す必要がなくなる。

(1)では、先行する談話の中に代名詞の先行詞があるが、(2)のように同一文中

にあることもある。その際、(2b)のように、表現方法の関係から先行詞が後ろになることもある。前後関係だけでは代名詞の照応関係は決まらないことがわかる。

(2) a. John saw a snake near him. (him=John)

b. In her apartment, Mary was assaulted by a thief. (her=Mary)

(斎藤・安井 1983: 142)

単純に、名詞句と代名詞の順序で照応関係が成立するわけではないことは、(3)の例からわかる。ここでは先行している名詞は、代名詞の先行詞になっていない。順序以外の要因が関係している。

(3) a. *Near John, he saw a snake. (he=John)

b. *In Mary's apartment, she was assaulted by a thief. (she=Mary)

(斎藤・安井 1983: 142)

次の例の *this* は言語の中で既出の表現を指示しているわけではない。言語外の現実の人物を指し、談話の中に導入にしているのである。

(4) This is my colleague, Mr. Arnold Landon.

(COBUILD)

これは、指示代名詞の *this*, *that*, *these*, *those* によく見られる用法である。指で指し示すように、実際の事物を指し示す働きである。

代名詞はいくつかの種類に分類される。人称代名詞、再帰代名詞、相互代名詞、指示代名詞、不定代名詞、関係代名詞、疑問代名詞である。人称代名詞と一部の疑問代名詞や関係代名詞には格変化があるが、他の代名詞には格変化はない。統語的な違いもあれば、意味的な違いもある。ここでは代名詞を照応関係からの分類を試みよう。

照応関係を結ぶ対象を基準に、代名詞を分類すると下記のようなになる。

言語内照応

義務的照応

再帰代名詞 相互代名詞 関係代名詞

自由照応

人称代名詞 指示代名詞

言語外照応

指示代名詞 人称代名詞(I, you, it) 疑問代名詞

言葉の中での照応関係と、言葉以外の世界との照応関係に分けられる。例えば、(1)の she は前の文の that girl と照応関係にあるが、これは言葉の中の世界での既出の情報との関係なので、言語内照応に分類される。言語内照応の代名詞の中でも、代名詞が含まれる文の中に先行詞が必要とされるのが、再帰代名詞、相互代名詞、関係代名詞である。一方、談話の中にも先行詞を求めることができるのが、人称代名詞や指示代名詞である。言語外の世界に先行詞を求めるのが、言語外照応である。例えば、(1)の疑問代名詞の Who は現実世界の誰かのことを指しているのが、言語外照応になる。このように、疑問代名詞、指示代名詞が言語外照応になる。また、人称代名詞の I と you も言語外照応になる。これらの指示対象は言葉の中ではなく言葉の外に存在する。人称代名詞の中でも it は、言語内照応と言語外照応の両方の性質が見られる。本稿では、it の照応関係の特殊性を明らかにしていく。

話し手と聞き手の間で共有された特定の情報があり、その情報を言葉の中で繰り返すときに代名詞が用いられる。話し手がその情報に対応する代名詞を用いることで、聞き手による指示されている情報の特定が容易になる。情報は名詞句という形で表現され、代名詞がそれを受けて、発話が展開されていくのであるが、it が指示する情報には他の代名詞とは異なる点が見られる。それは、特定の名詞句や事物を指示しない用法である。

3. it は何を指すのか

3.1 二種類の it

代名詞の it の指示対象は言語内の場合もあれば、言語の外の場合もある。言

語内では、基本的には人間以外を表す名詞句を指示するが、指示の対象となる範囲は名詞句に留まらないこともある。さらには、言語の外にも指示対象を持つことができる。次にあげる、(5a) (5b)の *it* は、それぞれ、*the spring* と *the beast* という名詞句を指示している。

- (5) a. I love the spring --- it's a wonderful time of the year.
b. This little beast is a lemur and it lives in Madagascar.
c. There were people crying, buildings on fire. It was terrible!

(LDOCE)

(5c)では、言語内に直接対応する名詞句はない。直前で述べられた場面を指している。同様に、次の(6)では、*it* は特定の名詞句を指示していると言えない。(6)の例では、これまでに表された場面ではなく、*it* は漠然として状況を指している¹⁾。このように指示する名詞句がない場合でも *it* は主語として用いられるのである。

- (6) How's it going, Bob? I haven't seen you for ages. (LDOCE)

(5)の *it* は言語内照応の例であり、(6)の *it* は言語外照応の例である。言語外照応でも、指示代名詞の *this*、*that* とは異なり、特定の事物を指し示すのではなく、話し手の周りの状況や、話し手の置かれている状況を指示している。

このように、代名詞の *it* の用法は、先行文脈の名詞句を指示する用法と状況を指示する用法の二つに分けられる。本稿では、後者を状況の *it* と呼ぶこととする。状況の *it* の特徴が、形式主語などのさまざまな文脈で用いられる *it* の用法につながることを示していく。

3.2 状況の *it*

ある状況を話し手が話題にすると、聞き手はその状況の存在を意識することになる。(7)は、ドアがロックされたときの対話の例で考える。

(7) “Who’s it?” --- “It’s me, Jay.”

ノックされた側は、you ではなく、it を使う。ノックをした人は、周囲の状況に含まれている情報ではあるが、相対する話し手にはなっていないからである。代名詞が指示する情報は話し手と聞き手が共有している情報である。ここでは、話し手は it を使うことで、ドアをたたく人を談話の中に取り込むのである。it が表しているのは、共有されている情報が存在することにとどまり、言葉が使われている場面から、it の指示対象が理解される。この it も状況の it の一種と言えよう。状況の it の働きは、共有されている情報の存在を示すことであると考えられる。他の代名詞は、それに加えて、具体的な指示対象を持つわけであるが、状況の it の具体的な指示対象は、状況から判断されるところに特徴がある。(5c)のように言語内の先行する文脈のこともあれば、(6)(7)の例では、場面のような言語外の情報を基に指示対象が具体的になっている。次に、これら以外の方法でも、指示対象は具体化されることを見ていく。

3.3 天候、時間などを表す文の主語

状況の it で示そうとしている情報を周囲の状況という言語外や先行文脈に求める例をあげた。状況の it が指している情報が文中において何らかの形で、具体化されることはないだろうか。次の例では、it が主語になり、後続するの要素の助けを借りることで、指示される内容が明らかになっている。

(8) a. Is it still raining?

b. It was 4 o'clock and the mail still hadn't come.

c. It's my birthday today.

d. It's over 200 miles from London to Manchester.

e. It gets dark very early in the winter.

f. It's three years since I last saw her.

(LDOCE)

(8)のすべての例文の主語に it が使われている。これらの文は、それぞれ、天候、時刻、日、距離、明暗、時間などを表す文である。この it は何を指してい

るのであろうか。it が指示する先行詞は文脈の中から見つけられない。これまでの例では、言語外の状況などから指示されていることが具体化されていたが、ここでは、後続する述部の段階で具体化される。(8)の文では、述部から天候、時間、距離などを話し手が話題にしていることが聞き手に理解できる。これらの主語の it は、情報の存在を示して、聞き手の注意を後続する部分に導くための目印のような働きをしている。聞き手の注意は後の方へと導かれていき、そこで it で示そうとしたことが理解されるのである。

代名詞の働きの一つは、何らかの情報を指示することにある。代名詞が用いられるということは、代名詞が指示する何らかの情報が存在することが前提になる。(8)では、it が指示する対象が見当たらない。この場合には、it は情報が存在することを示すだけの働きをしていると考えられる。その情報の具体的な内容は後の述部で示される。状況の it のこのような働きは、これまでの例と同様である。違いは、指示する情報の具体化の方法にある。

このような働きをする代名詞が求められるのは、英語には主語が必要なことと関連がありそうである。主語には動作主や経験者などの情報を表す名詞句または、代名詞が用いられるが、そのような情報を文の主語に必要としない場合に、情報が存在することだけを示す状況の it が主語に用いられると考えられる。述部に必要な情報は明らかになるので、主語には特定の情報は必要とされないのである。it は聞き手の注意を述部の方へ向ける働きをしている。聞き手の側にすれば、it に相当する情報が見つからなければ、後続する情報に注目することで意図されている情報が認識できるのである。

it で話し手と聞き手の間に共有されている情報が存在することが指摘され、その情報は述部以降で具体化されるとしたが、この情報の配置は、文の中の基本的な情報の配置と似ている。文頭の方には旧情報を、文末の方には新情報を配置するのが、基本的な情報の配置とするならば、この it の用法はそれに従った用法と言える。情報の流れに沿って、文を構成するためには、主語には、後方へと注意を持続させる表現が必要になる。状況の it はそのような働きをしていると考えられよう。

3.4 形式主語の it

形式主語の it を主語とする文も(8)の状況の it と同じような構図が当てはまる。主語が形式主語の it の文では、it の指示対象は同一文中に後続している。

(9) a. It was hard to believe that he had become this savage with the bare knife.

b. It really hurts me to be going away.

(10) a. That he had become this savage with the bare knife was hard to believe.

b. To be going away really hurts me.

(Biber, D, Johansson, S, Leech, G, Conrad S, and Finegan, E 1999: 155)

主語の it は、(9a)では that 節を、(9b)では不定詞句を指示している。それは、それぞれ(10a)(10b)のように it の位置を that 節、不定詞句で置き換えられることからわかる。ここでも、it は情報の存在を示して、聞き手の注意を後方へつなげるための目印の働きをしている。it の具体的な指示対象は後方に現れる。(8)の文と同様の仕組みになっている。主語の時点では具体化されていない情報が後方で具体化されているのである。しかしながら、(8)の文とは違って、ここでは、述部で情報が具体化されるわけではない。情報が具体化される位置は述部の性質によって変わってくると言えよう。

述部が状況の it の具体化と関係していることは、(11)のような例からもわかる。主語が it で述語が、seem の場合である。

(11) a. It seems that Edith has just lost the will to live.

b. *That Edith has just lost the will to live seem. (中右 2013: 21)

(11a)は、(9a)と同じように、主語が it であり、that 節が後続される。形式主語の it で、that 節を指示しているかのように見える。しかしながら、(9a)は(10a)のように that 節を主語にすることができるが、(11a)は、(11b)のが示すように、that 節を主語にした文にはならない²⁾。(9a)の形式主語の it の場合は、it が目印になって、that 節などで後述される部分に具体的な情報が述べられていると考えたが、(11a)を同様に考えることはできない。では、どのように考えればよいであ

ろうか。(11a)では、itの具体的な情報を表しているのは、that節ではなく、述部の seem であると考えられる。すでに(8)の例で指摘したように、状況の it を主語にした文の述部は具体的な情報を示すことができる。it seems の部分でひとまとまりの情報を表していると考えられないであろうか。(11a)の it seems は副詞のような働きで、意味的には it seems=seemingly のような関係になっている。seem と同じように用いられる述語は、happen、occur、hit、strike、look、sound などの話し手が心理的または知覚的に何らかの影響を受けたことを表す述語である。that 節で述べられる命題の話し手への影響が表わされている。it を主語にした文で、こうした述語が用いられた場合には、it の具体的な情報は、述部に見られ、that 節とはそのような関係にはない。そのため、that 節を主語にした文への書き換えができないと考えられる。述語の性質の違いが、状況の it に後続する指示対象の具体化の方法の違いと関係していると言えよう。統語上は同じ構造のように見えるが、述語の違いにより情報構造が異なってくる。

3.5 目的語の it

先行文脈に先行詞を持たない状況の it を主語にした文を取り上げてきたが、状況の it が目的語にされることもある。その場合にも、働きは、主語の場合と同様であると言えそうである。目的語の it が漠然と周囲の状況を表す場合がある。

(12) a. He's hoping to make it big on TV.

b. Take it easy! Don't panic. (OALD)

状況の it は情報の存在を示すが、これらの文の it は具体的な指示対象はなく、漠然と周囲の状況を指していると言えよう。

形式主語と同様に、目的語の場合も、状況の it の指示内容は文中の後方の要素で具体化される。

(13) a. I like it here.

b. He hated it in France (= did not like the life there). (OALD)

(13a)の like の目的語は it であるが、it は先行詞を持っているわけでない。it の具体的な内容は後続する here である。(13b)にも同様のことがあてはまる。it の具体的な内容は、後の in France に現れている³⁾。好悪を表す動詞で、このような構文が可能である。like と hate は他動詞なので目的語が必要である。代名詞は目的語になることができるので、情報の存在を示す it が目的語として用いられている。その後には here や in France のような具体的な指示内容が続いている。これらは、目的語になれる形ではない。主語に状況の it が用いられる場合と同様の仕組みである。話し手は、聞き手に共有している情報の存在を示し、それを後方で具体化している。

好悪を表す動詞の目的語に it を用いて、節で情報が具体化される表現がある。

(14) a. I don't like it when you get angry.

b. Pam hates it when Lee calls her at work. (LDOCE)

動詞の目的語に it、そして直後に when 節を用いるという構文である。when 節で it の具体的な内容が述べられる⁴⁾。話し手は it を目的語とすることで聞き手に情報を提示すること示唆し、そして、その情報を when 節で具体化している。like は名詞節を目的語にしない動詞である。目的語に it を用いることで、後続する節で情報を提示することが可能になる。

好悪を表す動詞と when 節という組み合わせ以外にも「it+名詞節」の形をした表現がある。

(15) a. Rumor has it that they plan to get married.

b. He took it for granted that he would pass the exam.

c. The hotel's owners see to it that their guests are given every luxury.

(LDOCE)

ここでは目的語の位置に it がきて、その後方に that 節が続く。it の具体的な内容は、後に続く that 節で表わされている。it を目的語にして、具体的な中身を

後続させるという表現方法である。統語構造は異なるものの、これまでの例と同様に、状況の *it* を用いることで、*it* を目印として情報が存在することを表し、具体的な内容は後続されている部分で表すという情報の流れに違いはない。

先行する文脈に先行詞が見られない場合、話し手はとりあえず *it* と言うことで、後で具体的な内容を述べるのが可能になる。聞き手にとっては、先行詞が不明な *it* が出てくると、具体的な情報が後に出てくる合図のようにとらえることになる。具体的な情報は後に出てくることが *it* によってわかるのである。*it* が主語であっても、目的語であっても、この仕組みに違いはない。

4. *it* と *that*

it と同じような意味を表す代名詞には *that* がある。*it* と同様に、*that* にも言語内照応と言語外照応の働きがあるが、*that* には目印のような働きはない。両者の相違点から *it* の特徴を見てみよう。

it は、人称代名詞なので、話し手と聞き手との間で共有されている情報が存在することを含意している。一方、*that* は指示代名詞で、指示対象となる具体的な事物、事象を指し示している。言語内であれ、言語外であれ、ある対象に向かっての指示を表す。例えば、次の例では、*it* を使った場合、*the car* という表現を代用しているが、*that* で答える場合は、対象物を指さしながら、答えていることになる。

(16) a. Whose car is that? It's mine.

b. Whose car is that? That's mine.

(佐藤・田中 2009: 125-128)

it は話し手と聞き手が共有している情報のことを指すが、*that* はある事物を「あれ」と指さすように指示している。*it* は言語内の情報を指示することが優先されるが、*that* は言語内であれ、言語外であれ何かに対する指示を表す。

That's it という慣用表現は OALD では、*used to say that somebody is right, or is doing something right* と説明されている。つまりは、*yes* の強調として使われる。何らかの具体的な事(*that*)が、話し手と聞き手の間で共有された、つまりは話題

にされた情報(it)であることを示すので、肯定の強調表現になる。

it は話し手と聞き手の間で共有された情報の存在を示すが、that にはそのような働きはない。具体的になっていることを指で指し示すかのように指示するのである。一方、it は、共有されているが、具体的になっていない情報の存在を示すことができるのである。

5. おわりに

代名詞は名詞句を指示することが働きの一つであるが、it の場合は指示の対象が独特である。このような働きだけでなく、it は目印または合図のような働きをして、具体的に指示する情報は後続する他の部分で表されるという用い方もされるのである。これが代名詞の中でも it の特徴である。本稿では、この状況の it の特徴を明らかにしてきた。状況の it の指示対象は、周囲の状況のこともあれば、後続する要素で述べられている情報のこともあることを示した。その後続する要素には、名詞句、名詞節だけでなく、述部も含まれることを明らかにした。述部を含むことで、(8)や(11)の事例を一貫した考え方で説明が可能になる。具体的な指示対象が先行する文脈にないということは、状況の it は、他の代名詞のような代用表現にはならないということになる。

代名詞は主語や目的語のような文の中核的な部分で用いられ、省略されにくい。英語では日本語よりも代名詞の使用頻度は高そうである。働きを考えれば、代名詞は重要であるが、強勢が置かれることは少なく目立たない存在である。代名詞なしでは、同じ言葉の繰り返しになり、複雑でわかりにくい文の連続になってしまう。代名詞は文の内部だけでなく、文と文をまたいで話題をつなぐことにも役に立つ。つながりのおかげで、情報の流れが維持され、円滑な意思疎通が図れる。良好な言語の運用においては、適切に代名詞を用いることが求められる。そのためには代名詞への理解は不可欠であろう。

注

- 1) LDOCE には、used to refer to the situation that someone is in now, or what is happening now と定義されている。
- 2) it を主語にした文で that 節ではなく when 節が後続することがある。

It really annoys me when people forget to say thank you.

It makes things awkward for everyone when you behave like that.

It is very sad when children feel unwanted. (OALD)

ここで it が指示している情報は、後続する when 節で具体化される。when 節で表されていることが行われた場合に起こることを it が指示していると考えられる。これらの文でも when 節が it に変わって主語になることはないので、it は形式主語とは言えない。

3) (13b)の括弧内の言い換えは OALD による。

4) 好悪を表す動詞以外でも目的語に it そのあとに when 節の形で用いられることがある。

I can't stand it when you do that. (OALD)

また、目的語に it、その後に if 節という形も見られる。

I'd appreciate it if you let me get on with my job.

How would you like it if someone called you a liar? (OALD)

参考文献

安藤貞雄. 2005. 『現代英文法講義』 東京: 開拓社.

Biber, D, Johansson, S, Leech, G, Conrad S, and Finegan, E. 1999. *The Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.

加賀信宏・大橋一人. 2017. 『一步進んだ英文法』 東京: 開拓社.

中右実. 2013. 「非人称 it 構文—語法と文法の不可分な全体を構文にみる—」 『英語語法研究』 第 20 号, 5-34.

斎藤武生・安井泉. 1983. 『名詞・代名詞』 東京: 研究社.

佐藤芳明・田中茂範. 2009. 『レキシカルグラマーへの招待』 東京: 開拓社.

Swan, M. 2017. *Practical English Usage 4th edition*. Oxford: Oxford University Press.

安井稔・中村順良. 1984. 『代用表現』 東京: 研究社.

[辞書]

Oxford Advanced Learner's Dictionary 9th Edition (OALD)

Longman Dictionary of Contemporary English 6th Edition (LDOCE)